設問１.

パレート効率性についてコメントしなければならない重要な性質が一つある。それが二つの意味で個人主義的であるということである。第一に、個人の厚生だけに関連したことであり、異なった個人間の相対的な厚生についてはふれていない。それは不平等を明示的に取り扱っていない。したがって裕福な人々をより豊かにするが貧乏な人は貧しいままというような変化はパレート改善になる。しかしながら富裕層と貧困層のギャップが広がることは望ましくないと考える人もいる。それは、望ましくない社会的緊張を引き起こすと考えているのである。多くの発展途上国は、社会のすべての主要分野が改善される高度経済成長期を経験することが多いが、その期間に富裕層の所得は貧困層よりも早く増加する。このような変化を評価するうえで、たんにあらゆる人々の状況が改善しているというだけで十分なのであろうか。この質問に対する答えについては経済学者は意見の一致をみていない。

第二に、各人が意識している自らの厚生という意味である。これは消費者主権の一般原理と一致している。この原理では、各個々人が、自らにとって必要かつ欲しいものが何か、何が自分にとって最も利益になるのか、ということを最も正しく判断できると主張される。

【出題の意図】

パレート効率性の基準からは貧富の格差は肯定されることになることの問題、パレート最適においては消費者主権が前提とされることを論じた文章を、その内容を理解して和訳できるかどうかを問う。

設問２.

市場の失敗が存在するときはつねに、市場価格は真の社会的費用や社会的便益を反映していない。そのような場合、経済学では―例えば、もう１人労働者を雇ったり、またはもっと財を輸入するか輸出することの―真の社会的限界費用を計算しようとする。これらを「社会的価格」または「影の価格（シャドウ・プライス」と呼ぶ。影の価格という言葉は、これらの価格が現実には存在しないが、市場価格に不完全にしか反映されない真の社会的費用や社会的便益であることを思い起させる。

市場の失敗が存在しないときには、何かの価格はそれの機会費用、すなわちあきらめた他の財の使用価値、に等しくなる。大量失業が存在する経済では、市場賃金は機会費用を上回っている―事実上、あきらめたものは個人の余暇である―が、労働者が非自発的に失業しているときには、市場賃金はこのあきらめた余暇の価値を大幅に上回っていることが多い。大量失業が存在するときの労働の影の価格は、あきらめた余暇のもつ低い価値であり、市場賃金ではない。

同様に資本市場が不完全にしか機能しないため、企業が「市場利子率」で資本を追加的に

調達できないときには、資本の影の費用、すなわち資本を一つの用途で用いたためにあきらめた他の用途から得られるはずの金額は、市場利子率をかなり上回るかもしれない。

**【出題の意図】**

市場の失敗においては社会的費用が反映されないが、経済学では社会的限界費用を重視すること、市場の失敗が存在しないときには価格には機会費用が反映されることなどの、市場の失敗に関する基本的な理解をもとに文章の和訳が適切にできているかを問う。

**設問３.**

累進所得税は所得の増加に応じて高い限界税率が適用されるため、累進度の程度によって個人の労働供給や、貯蓄、投資行動に非中立的な影響を及ぼし、ひいては生産を低下させる効果をもたらすなど、効率の面で問題を生じさせるおそれがある。他方、高所得者から低所得者への所得再分配効果を有し、課税を通じて公平な所得分配を実現することに資する。所得税における累進度をどのように設定するかは、効率性と公平性のバランスから考えられねばならない。(210 字)

**【出題の意図】**

累進所得税がどのようにして経済効率性上の問題を生じさせるのか、所得再分配効果と中質性がトレードオフの関係にあることを理解できているかを問う。